

ますます増えるトラフィック！ ISPバックボーン設計の過去、現在、未来

友近 剛史
吉村 知夏

NTT Communications, OCN

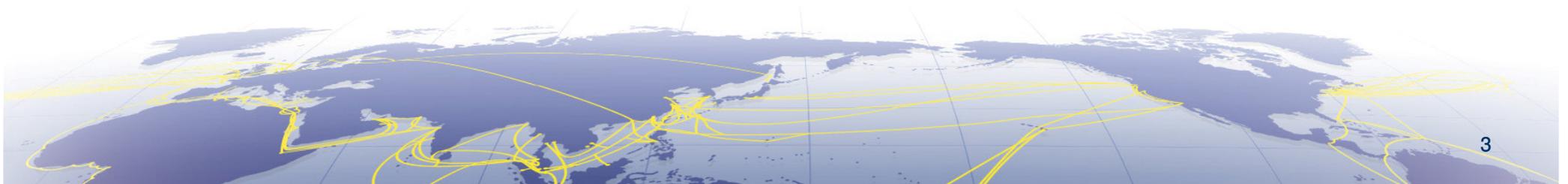
はじめに

- インターネットトラフィックは順調に増加
- 増えゆくトラフィックを輻輳なく、安定して運ぶことがISPの最大のミッション
 - 設計上の努力が欠かせない
- このセッションでは、
 - インターネットトラフィックの現状
 - OCNにおける、過去～現在の具体的な設計事例、課題を共有し、未来の設計についてディスカッションします



今回のフォーカス

- 話します
 - 設計技術
 - トラフィック状況
- 話しません！！
 - 政治
 - Peering戦略とか
 - Peerの構成とか
 - 法律
 - 帯域制御の是非とか



1. 日本のインターネットトラフィックの現状

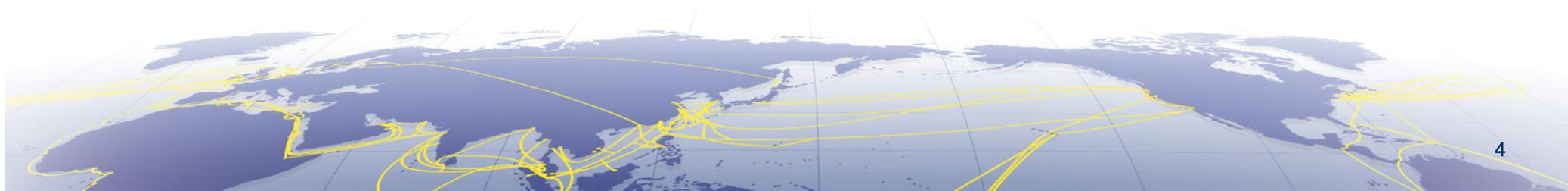
2. OCNの変遷(サマリ)

3. 過去の設計

4. 現在の設計

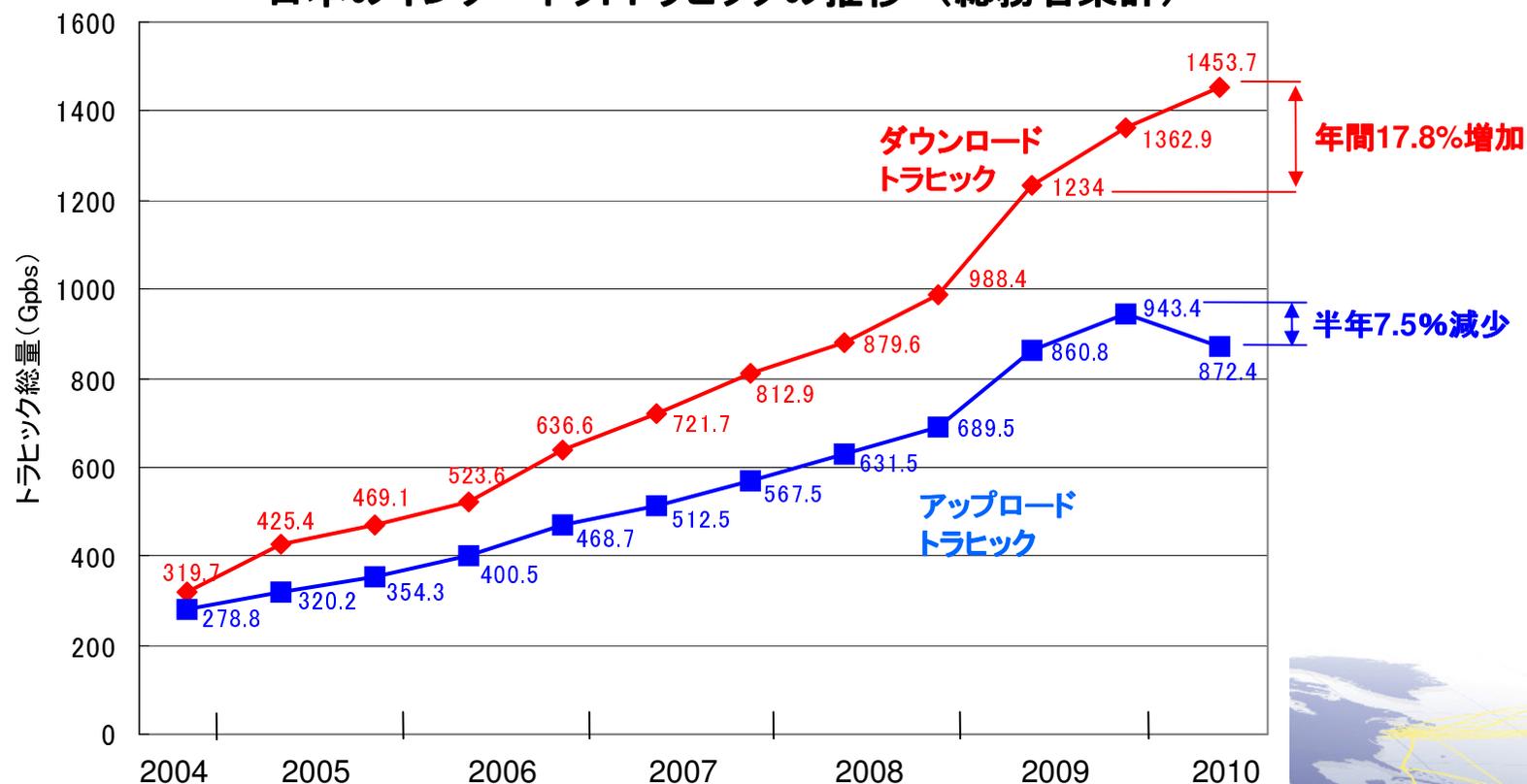
5. 未来の設計、構想

6. まとめ



- 日本のブロードバンド契約者のダウンロードトラフィックの総量は1.46T(テラ)bps。1年で1.2倍、5年間では3.4倍の増加(ダウンロードトラフィック)
- アップロードトラフィックにおいては、初めて減少(872Gbps)

日本のインターネットトラフィックの推移 (総務省集計)



(出典)総務省報道資料:我が国のインターネットにおけるトラフィックの集計・試算より
http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01kiban04_01000001.html

- 一契約あたりのダウンロードトラフィックも増加傾向
15.3kbps (2004) → 45.4kbps (2010)



「電気通信サービスの契約数及びシェアに関する四半期データの公表(平成21年度第4四半期(3月末))(平成22年7月6日 総務省報道資料)」より計算 (http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/02kiban04_02000023.html)

【出典】我が国のインターネットにおけるトラフィックの集計・試算 http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01kiban04_01000001.html

- 2009年11月→2010年5月のアップロードトラフィックの減少
 - 2010年1月 著作権法改正 (P2Pトラフィックの減少)
 - アップロードの帯域制御
- 昨今のダウンロードトラフィックの増加
 - HTTPストリーミング (動画視聴)
 - リッチコンテンツの更なる流行 (楽曲、映画、アプリケーション)
- 日本のインターネットトラフィックは順調に増加
 - おそらく今後も増え続ける
- ISPはどんな勢いで増速してきたか？
 - OCNの例



1. 日本のインターネットトラフィックの現状

2. OCNの変遷(サマリ)

3. 過去の設計

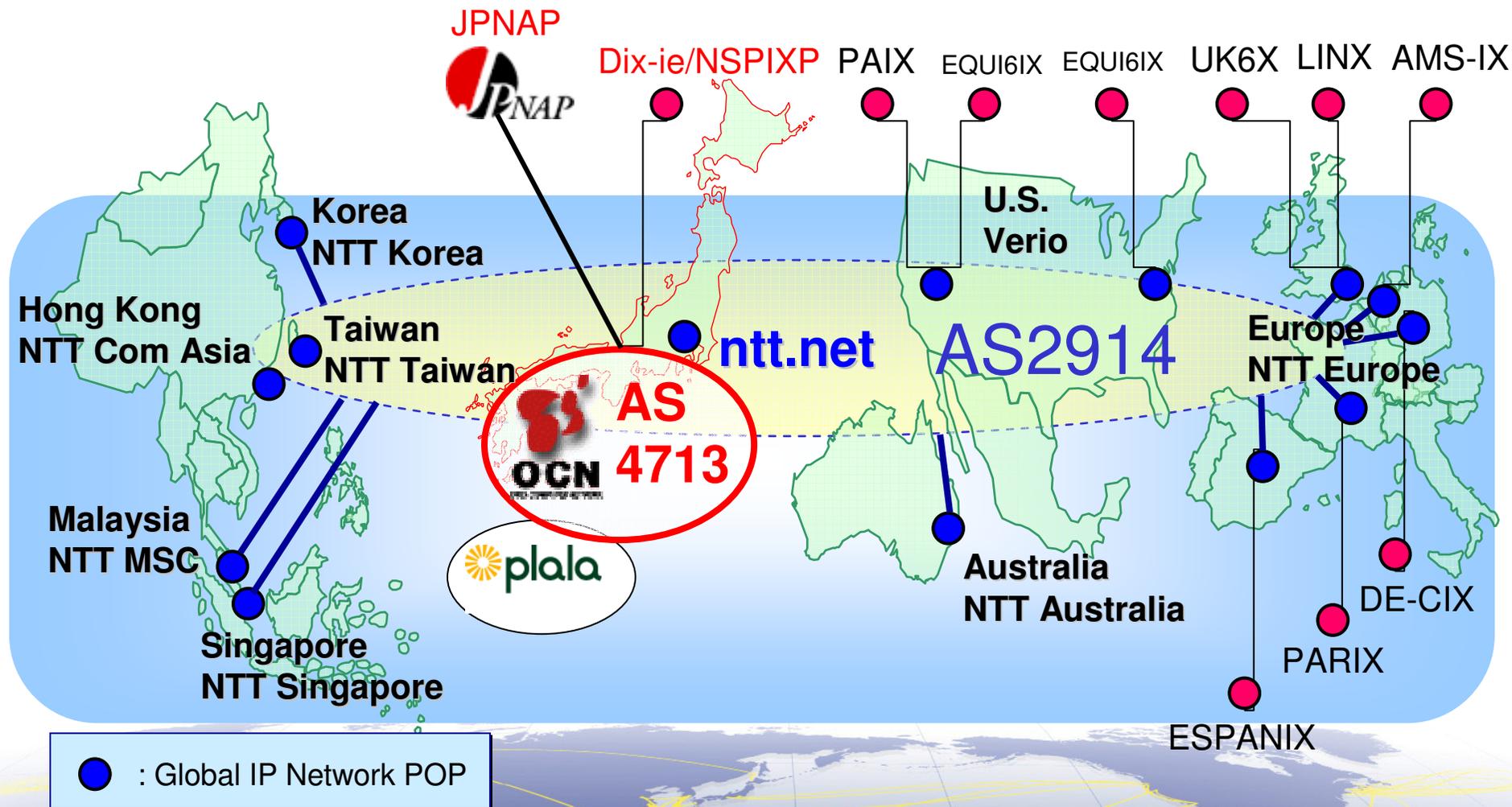
4. 現在の設計

5. 未来の設計、構想

6. まとめ



- 今回はOCN(AS4713)にフォーカス

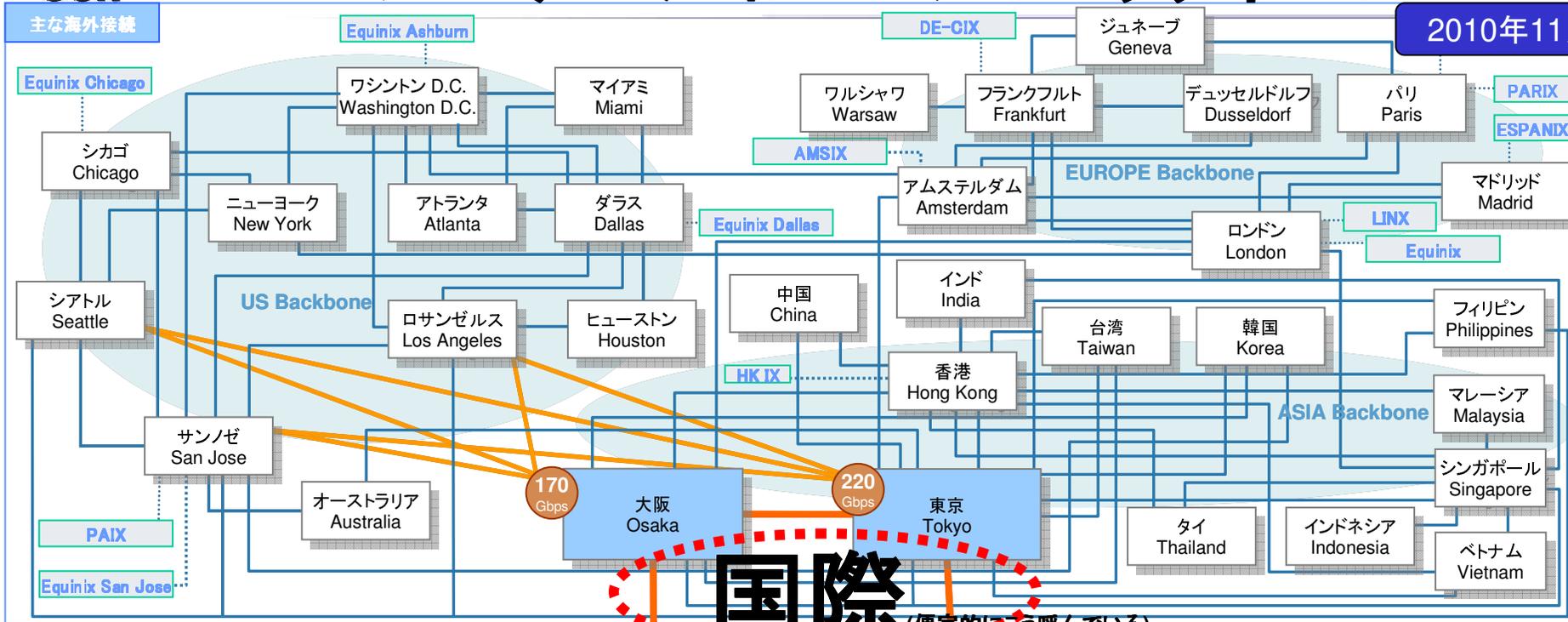




NTTコミュニケーションズのIPバックボーン

NTT Communications

2010年11月現在



国際

(便宜的にこう呼んでいる)

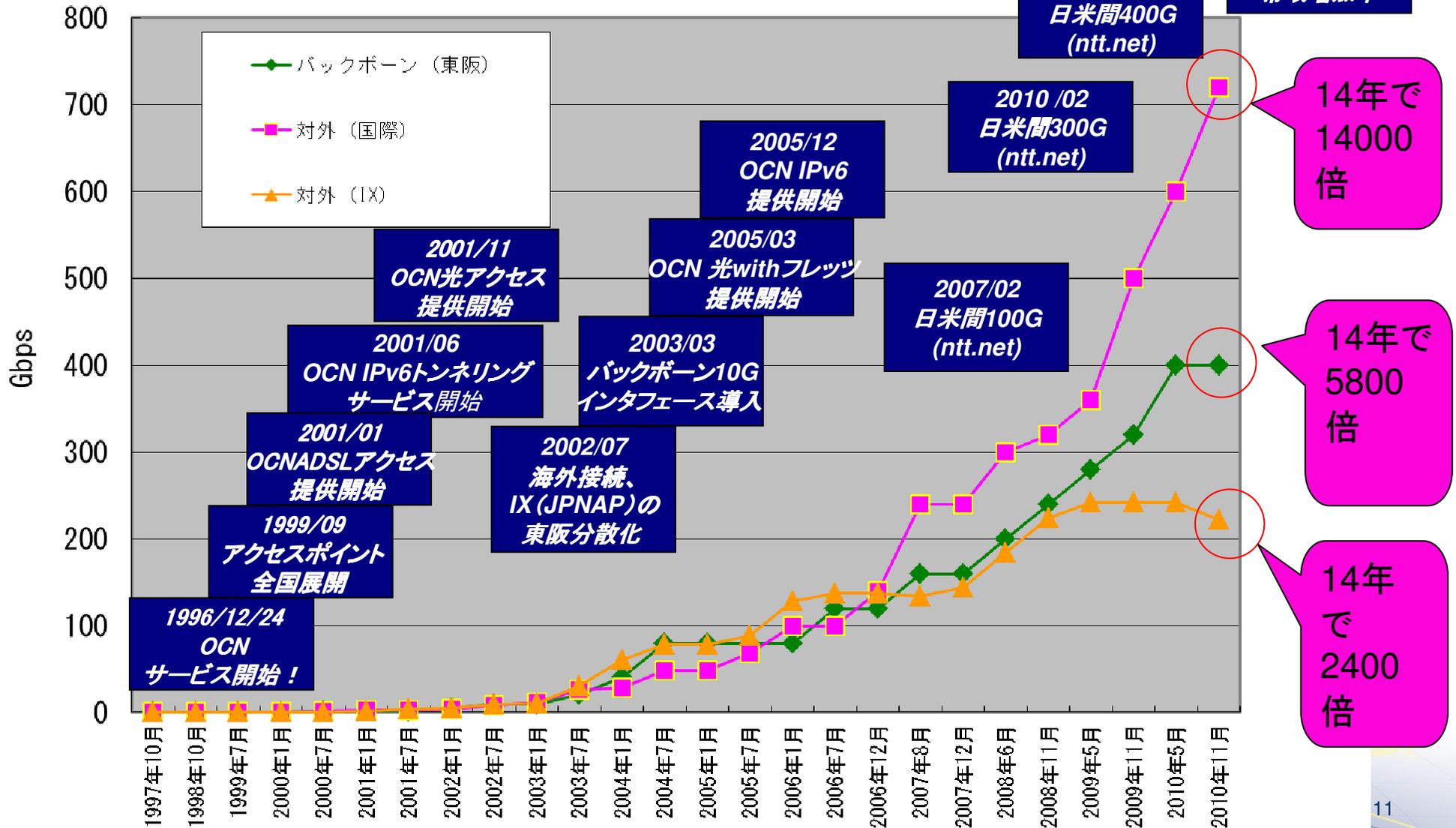


東阪

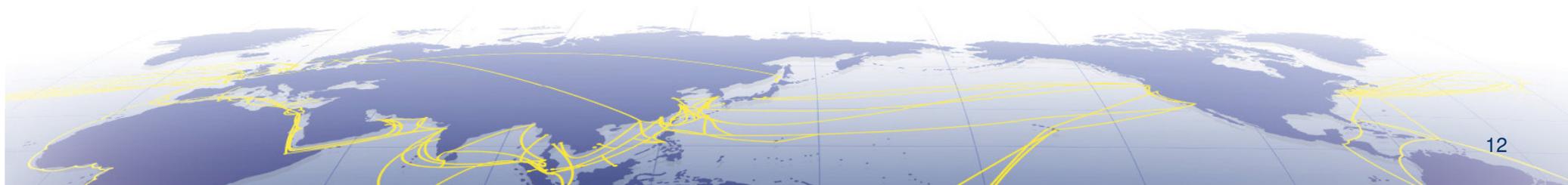
対外(IX)



OCNバックボーン帯域推移と変遷



- トラフィックの増加に伴ってバックボーンを拡張している
- バックボーン的设计にあたって、
 - どんな課題にぶつかったか？
 - どんな工夫をしてきたか？
- 過去から最近まで、ざっと見てみましょう！



1. 日本のインターネットトラフィックの現状

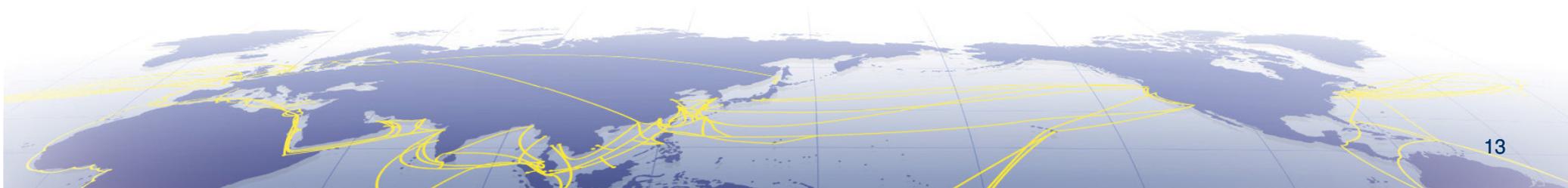
2. OCNの変遷(サマリ)

3. 過去の設計

4. 現在の設計

5. 未来の設計、構想

6. まとめ



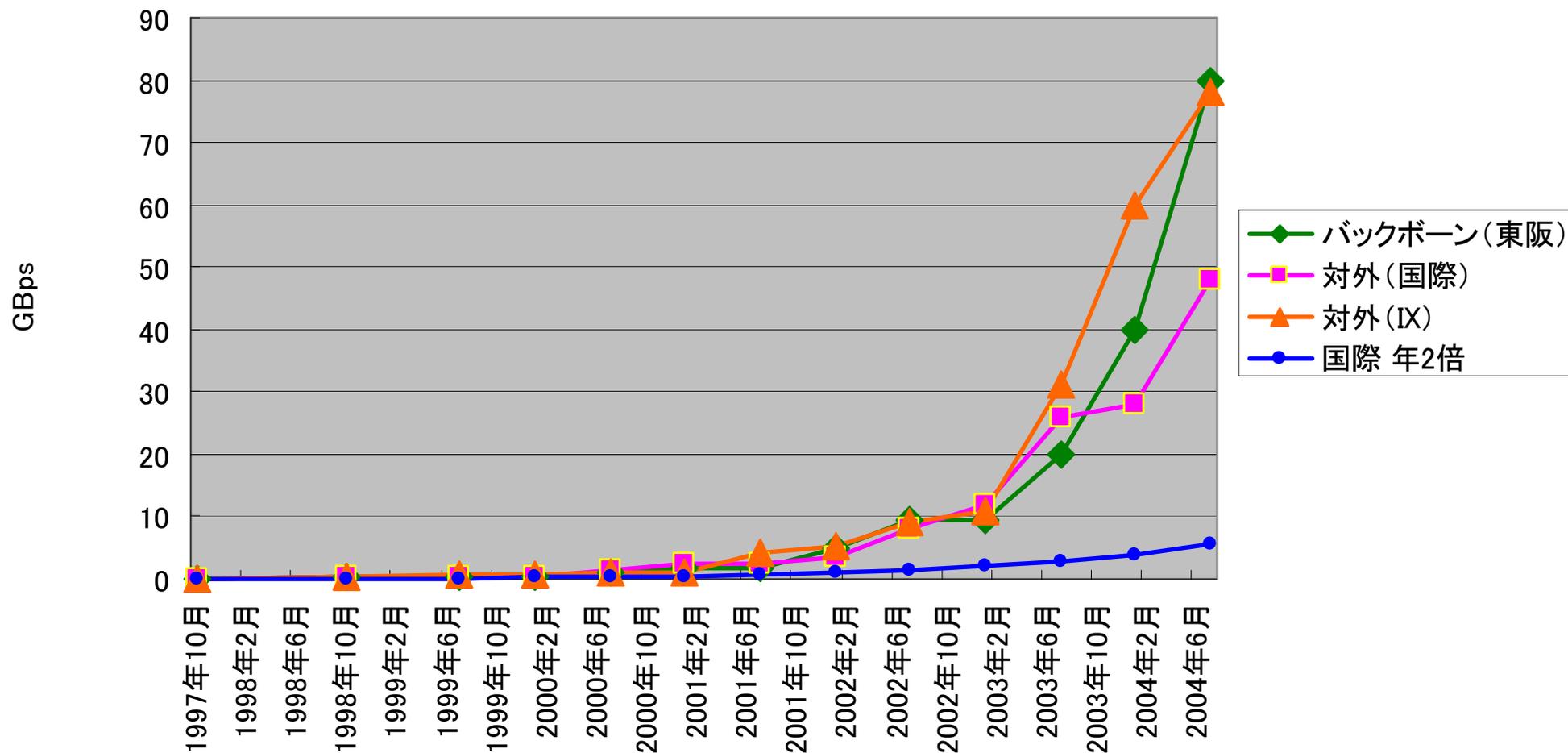
1. メディアの変遷
 - ATM、FDDI、Fast Ethernet
2. トラフィック増
 - 増設、新装置
3. 論理的な課題
 - OSPF経路の増大
→ static to BGP
4. 信頼性向上
 - コアPOPスクエア化
 - 激甚災害耐性化



TIME	OCNバックボーン(東阪)	対外接続(国際)	対外接続(国内IX)
2004.07	80. 0G	48. 0G	78. 0G
2004.01	40. 0G	28. 0G	60. 0G
2003.07	20. 0G	26. 0G	31. 0G
2003.01	9. 6G	12. 0G	11. 0G
2002.07	9. 6G	8. 0G	9. 0G
2002.01	4. 8G	3. 6G	5. 2G
2001.07	1. 8G	2. 5G	4. 3G
2001.01	1. 8G	2. 5G	1. 2G
2000.07	1. 2G	1. 3G	1. 0G
2000.01	500M	500M	600M
1999.07	375M	400M	600M
1998.10	270M	300M	500M
1997.10	69M	51M	91. 5M

7年弱で、東阪 1,159倍、国際 941倍、国内IX 852倍

OCNバックボーンの帯域と変遷



- 増設
- 新装置

3. 論理的な課題

OSPF経路の増大と対策 1/2

- ユーザの伸びが激しかった
- OSPF経路数の増大
 - OCNでは経路数が非常に増大していた
 - 1998年8月21日: 16557 (そのうちExternalが15546(94%))
 - 1998年9月21日: 17346 (そのうちExternalが16275(94%))
- Static経路をOSPFにRedistributeしていた
 - Confederation検討
- OSPF分割
- NG: 運用負荷増大
 - IS-IS検討
- JANOG IS-IS WGとかも
- NG: 導入大変、運用も大幅変更必要、実際効果あるかはっきりしない



3. 論理的な課題

OSPF経路の増大と対策 2/2

- Static経路をOSPFでなく、iBGPへ直接Redistributeした
 - external経路はBGP、トポロジはOSPFで管理
 - static設定しているルータでBGPを話した
 - その他
 - no export communityを利用
 - Route Reflectorの階層化
 - Full routeが不要なところではfilter
- 結果：内部ルーティングの安定性の向上が見られた
 - 運用の変更もほとんど無し
- JANOG4で発表



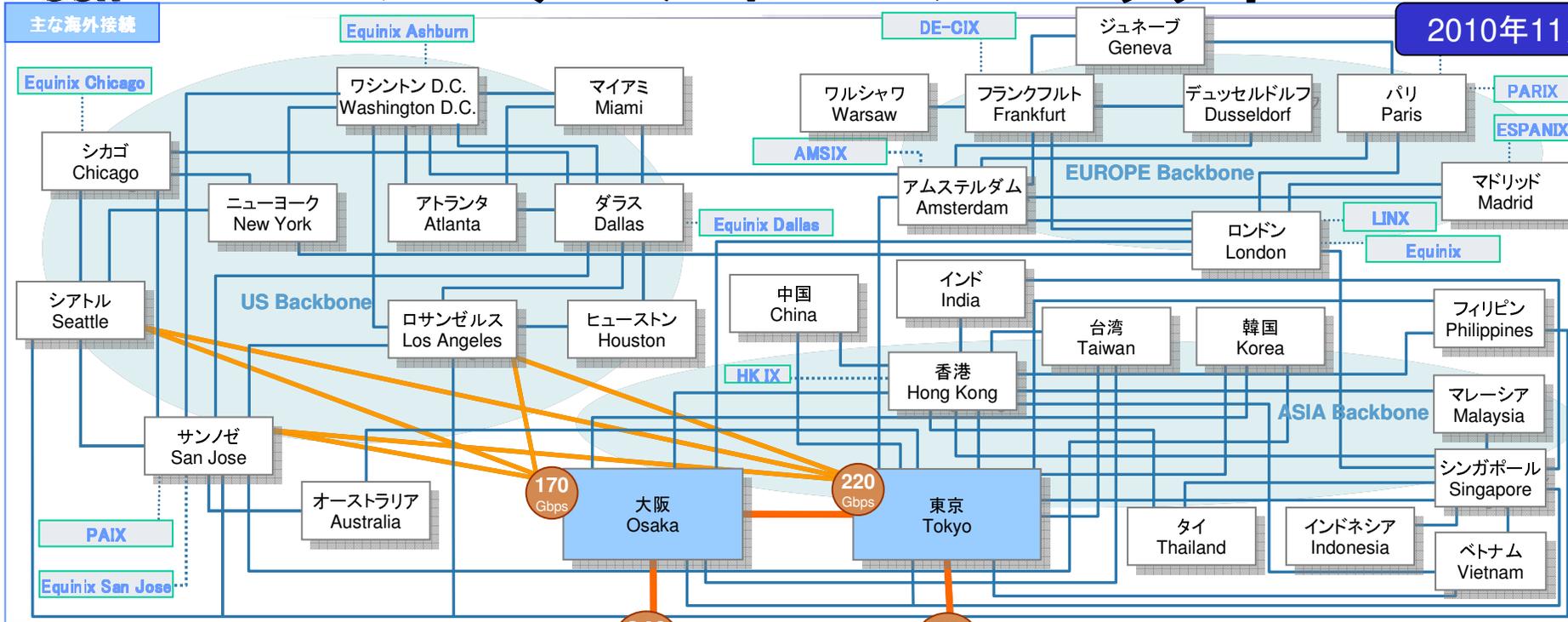
- インターネットの普及が進み、信頼性向上がますます必要になってきた
- 全経路を完全に二重化
 - ✓ 設備の二重化、ビル分散、ルート分散
- 障害時にも100%救済
 - 回線容量は、障害時にも100%救済が可能となるよう冗長回線を用意
- 激甚耐性
 - コア拠点間を100km以上離すことで、大規模災害が主要都市で発生しても影響範囲を最小限にいくとめる構成
 - 電気通信網基本計画解説書第1版(昭和63年9月)
 - 「震度Ⅶ級の地震が発生しても、約40kmビル間を離すことで、どちらかのビルは震度Ⅵ以下」
 - 東日本: 東京と群馬
 - 仮に東京エリアで大規模災害が発生しても、北海道や東北エリアでOCNに接続されるユーザのインターネット通信が救済
 - 西日本: 大阪と愛知



NTTコミュニケーションズのIPバックボーン

NTT Communications

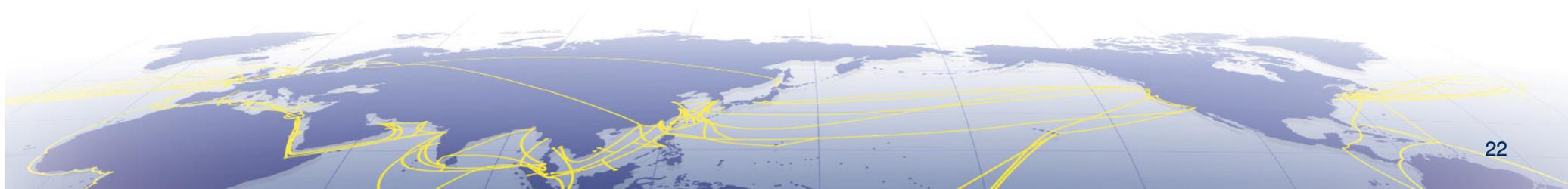
2010年11月現在



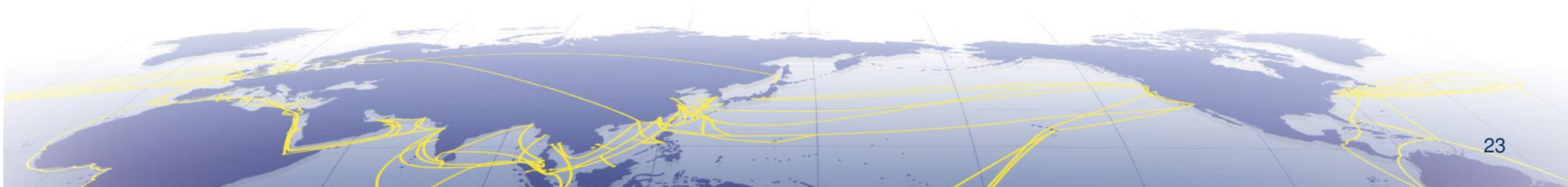
1. メディアの変遷
2. トラフィック増
 - 増設、新装置
3. 論理的な課題
 - OSPF経路の増大
4. 信頼性向上
 - ビル分散、ルート分散
 - 激甚災害耐性化

**ユーザの増加、トラフィックの増加、
インターネットの重要性増大
に付随した課題に対応してきた**

1. 日本のインターネットトラフィックの現状
2. OCNの変遷(サマリ)
3. 過去の設計
- 4. 現在の設計**
5. 未来の設計、構想
6. まとめ

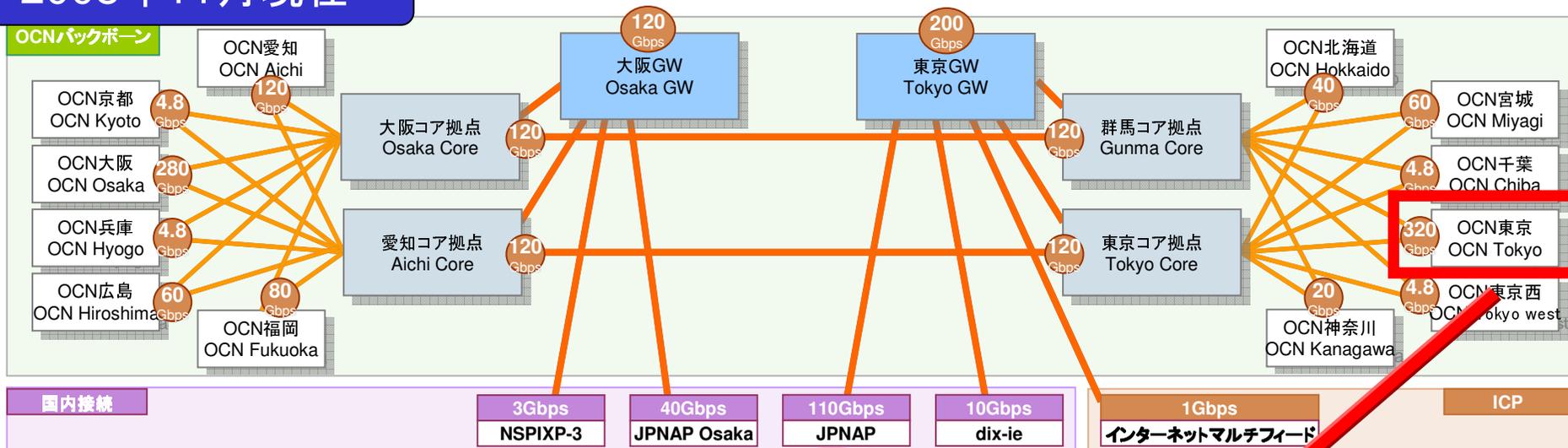


1. 東京POPの肥大化
 - トラフィックの集中
2. フォワーディングスケーラビリティの対策
 - FIBの増大
3. Link Aggregationの限界
 - 限界本数への到達
 - トラフィック偏り
 - 運用上の課題



- 2007～2008年ごろから東京POPの肥大化が課題に
- 現状トポロジのまま増強した場合、2009年中に東京POP 集約ルータの収容限界を迎えそう

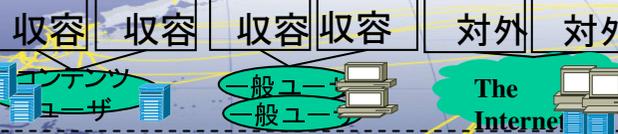
2008年11月現在



東京POP集約ルータ
収容限界。。

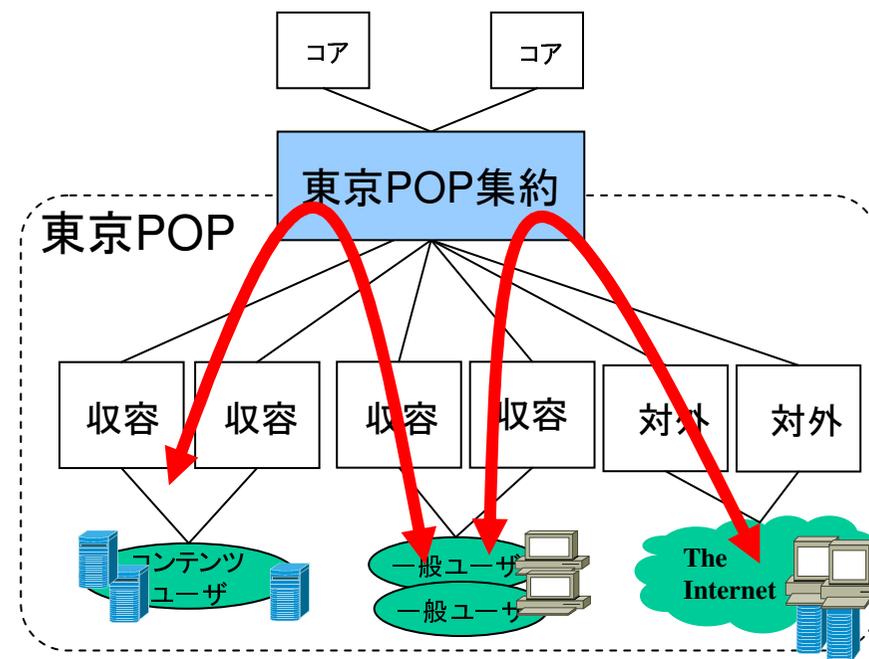
東京POP集約

東京POP拡大！



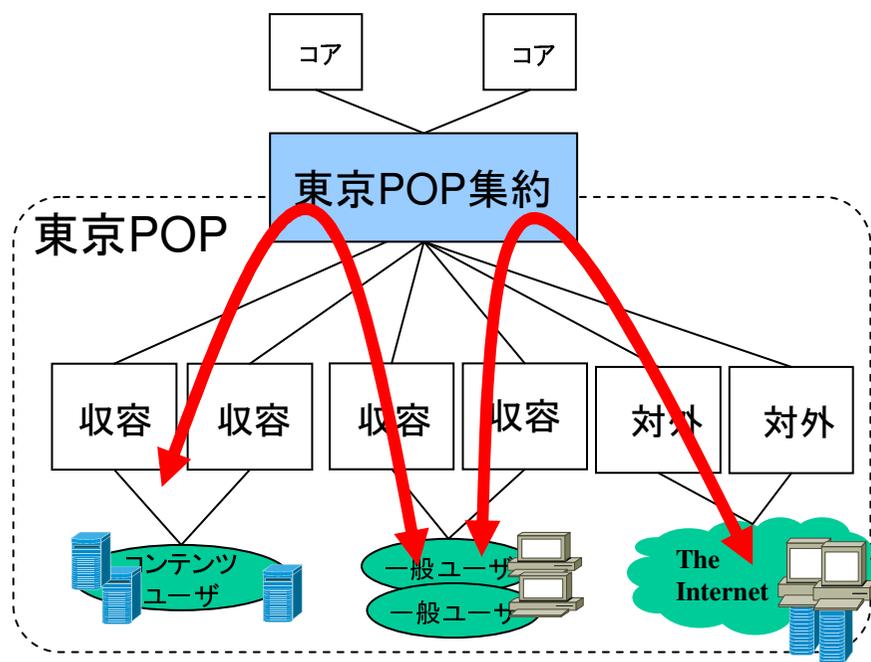
- 増加の原因
 1. 東京POPにユーザが多い
 2. 対外トラフィックの増加
 - 対外接続拠点は東京に集中

- よくよく分析してみると、
 - どうやら東京内に吸い込まれるトラフィックが多い
 - 1. 東京のコンテンツユーザ等が出すトラフィック
 - 2. 東京の対外接続トラフィック

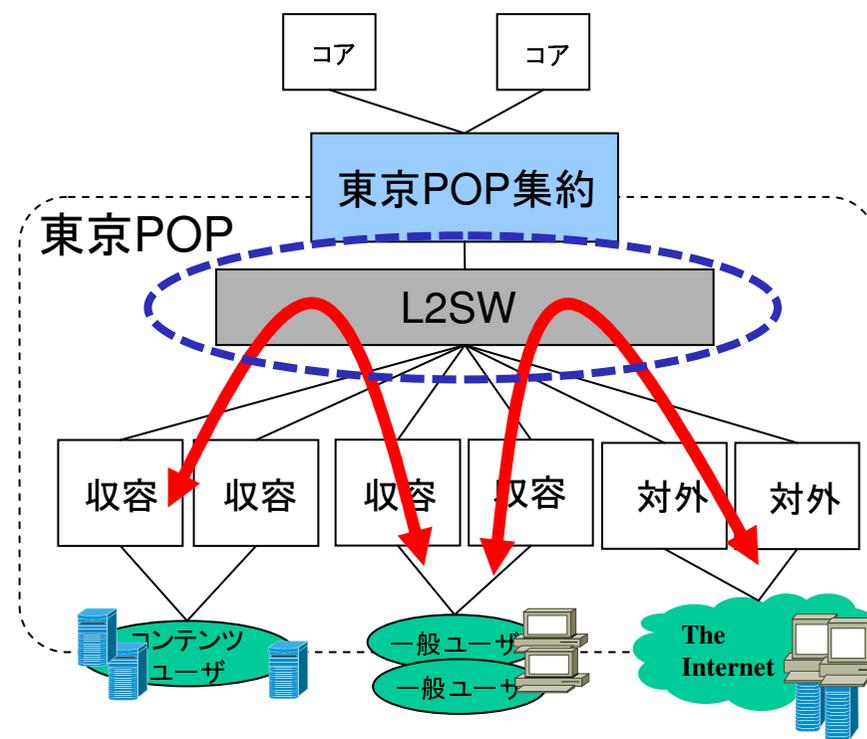


- 別にルータ機能は必要じゃなかった
- トラフィック集約用L2スイッチを導入

L2SW導入前の構成



L2SW導入後の構成

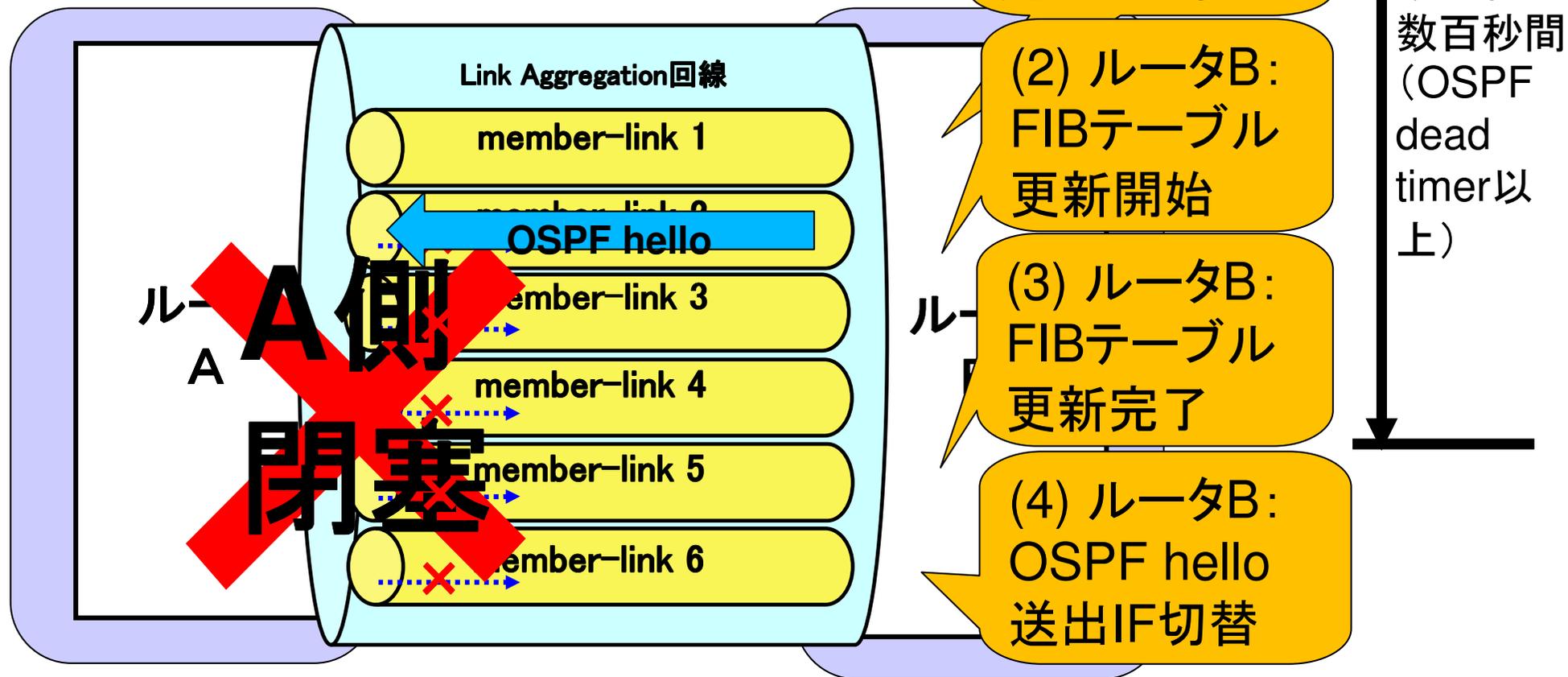


- トラフィック特性をよく見る
- コストとバックボーン拡張のバランスを取る

- ルータAとB
 - 複数のmember-linkでLink Aggregationを組んでいる(min-links=1)
 - OSPF neighborな関係
- ルータA側で、メンバリンク1本を残して閉塞
 - 残1本でOSPF Helloをやりとりするはず
 - なぜかOSPFダウン。。



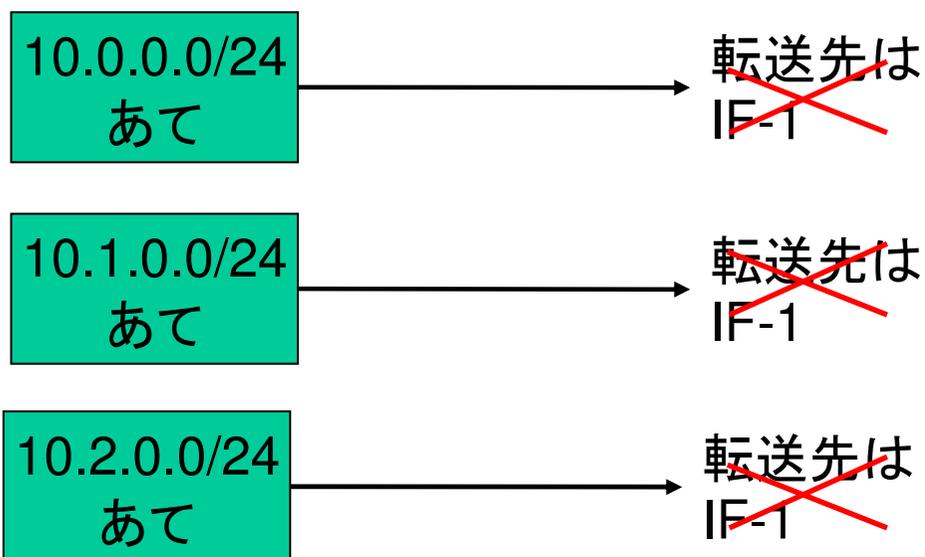
- 何が起きていたか？



光ダウン検知～FIBテーブルの更新完了までは、OSPF helloを送信できていなかった

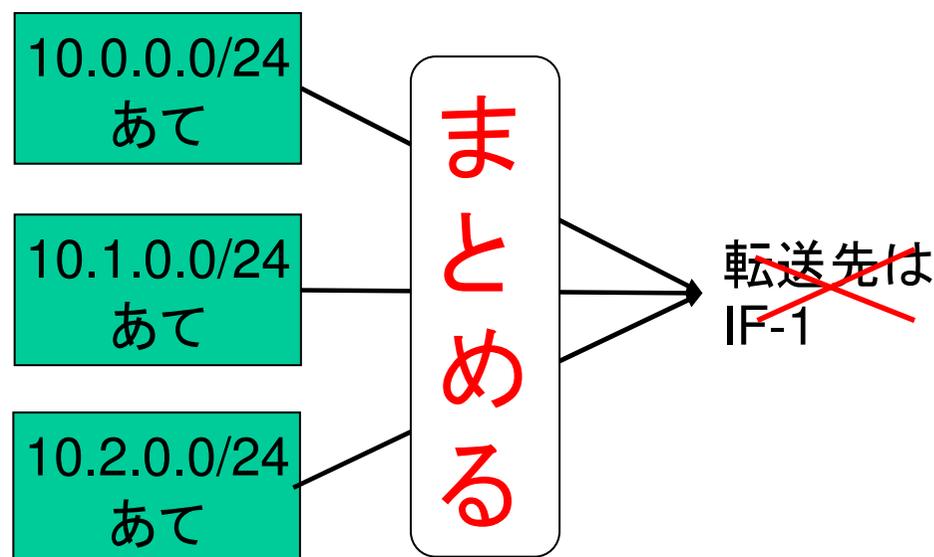
- フラットFIB構造をやめ、階層化FIBを導入
 - Cisco: BGP Prefix Independent Convergence(PIC)
 - Juniper: indirect-next-hop
 - BGP経路との紐付けではなく、ポイント毎にFIBテーブルを管理

【フラット構造のFIBテーブル】



※IF-1ダウン時は3個の書換が必要

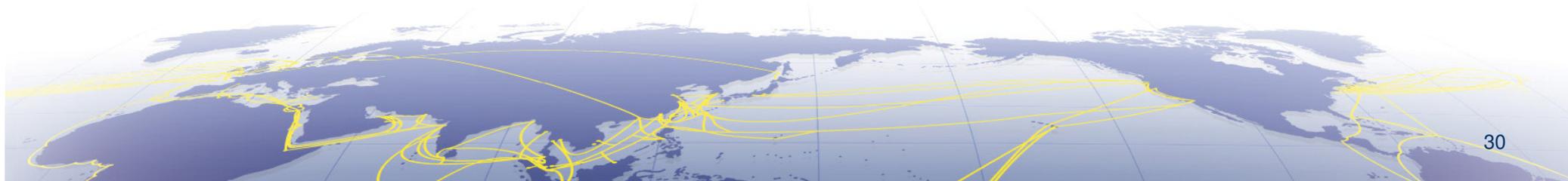
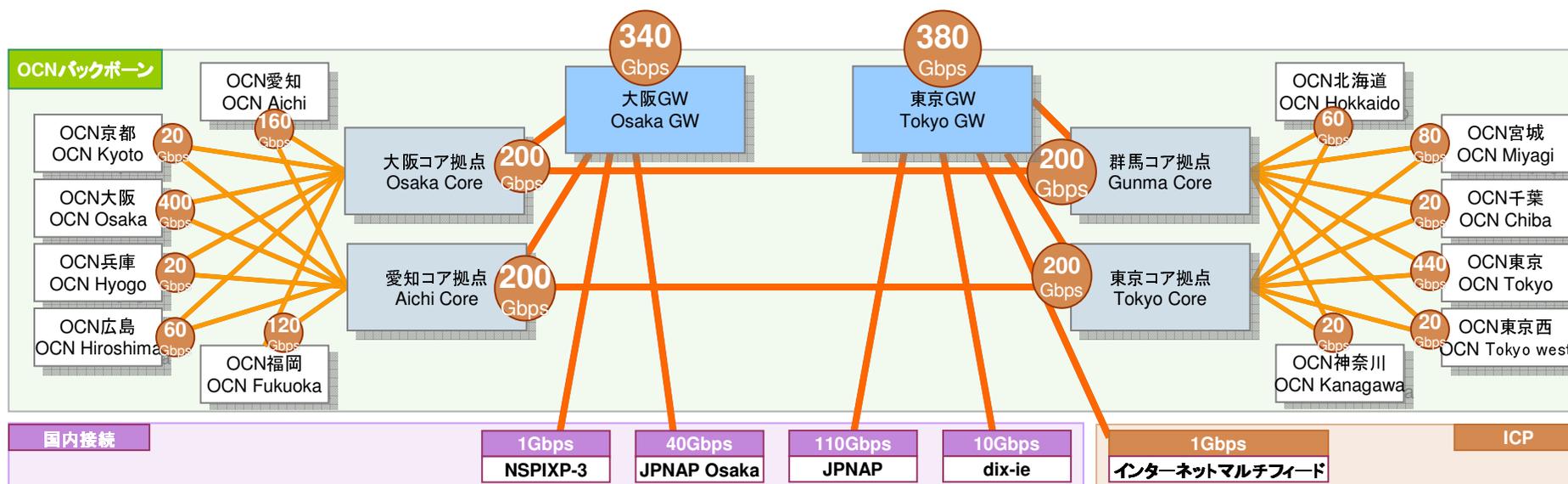
【階層構造のFIBテーブル】



※IF-1ダウン時は1個の書換でOK

FIBテーブルの集約が可能

- 2011年現在、Link Aggregationを複数回線で利用
- 課題が多い(バンドル上限、トラフィック偏り、運用課題など)



LAG内におけるトラフィック偏り(1)

前提: 単純なラウンド・ロビン方式(per packet)は、パケットの順序逆転が起こるため、採用できない → per flowへ(ラウンド・ロビン以外)

バランス方式: IPアドレスやMACアドレス等パケットの情報を元にhash算出して送出IFを決めるのが一般的

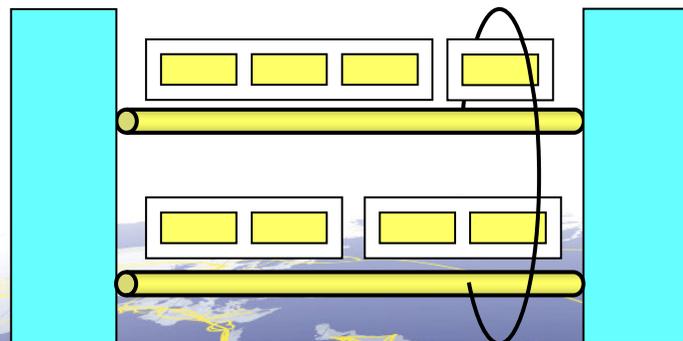


課題1:

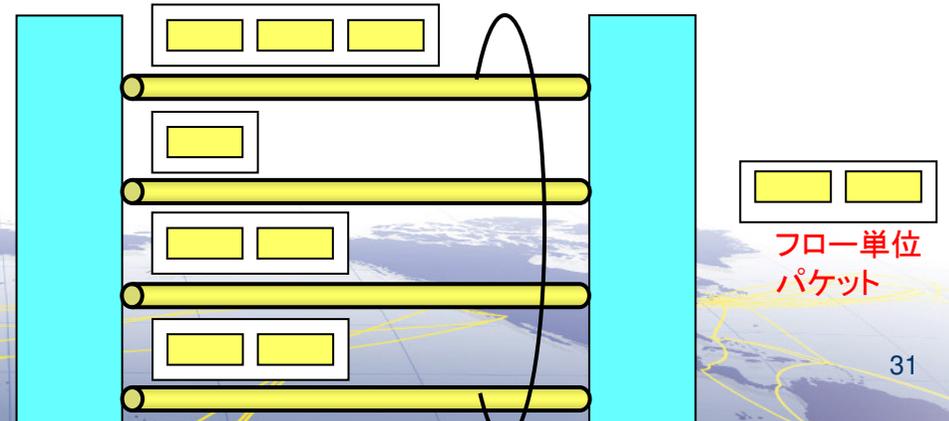
hash値毎のトラフィックはフロー単位で分散

物理回線数が多くなると、フロー毎のトラフィック偏りの影響を受けやすくなる

2本構成LAG



4本構成LAG



LAG内におけるトラフィック偏り(2)

課題2: hash値の要素数とトラフィック偏り

hash値の要素数が少ない場合、トラフィック偏りが発生する可能性が高い
結果として帯域を有効活用出来ない

例: hash値が8個の場合のLAG内トラフィック分散

5本LAG	4本LAG	3本LAG
IF#1 H1、H6	IF#1 H1、H5	IF#1 H1、H4、H7
IF#2 H2、H7	IF#2 H2、H6	IF#2 H2、H5、H8
IF#3 H3、H8	IF#3 H3、H7	IF#3 H3、H6
IF#4 H4	IF#4 H4、H8	
IF#5 H5		
2:2:2:1:1	2:2:2:2	3:3:2
10+10+10+10*1/2+10*1/2=40	10+10+10+10=40	10+10+10*2/3=26.7

hash値の数と物理IFの数によって均等分散できないケースがある

←分散比率
←LAGの実効帯域

5本LAGでも40Gしか流せない

3本LAGでも26Gしか流せない

参考： hash値の要素数による分散の違い

例1： hash値が8個の場合のLAG内トラフィック分散

5本LAG	4本LAG	3本LAG
IF#1 H1, H6	IF#1 H1, H5	IF#1 H1, H4, H7
IF#2 H2, H7	IF#2 H2, H6	IF#2 H2, H5, H8
IF#3 H3, H8	IF#3 H3, H7	IF#3 H3, H6
IF#4 H4	IF#4 H4, H8	
IF#5 H5		
40	40	26.7

hash値の要素数が多い
ほどマシになる

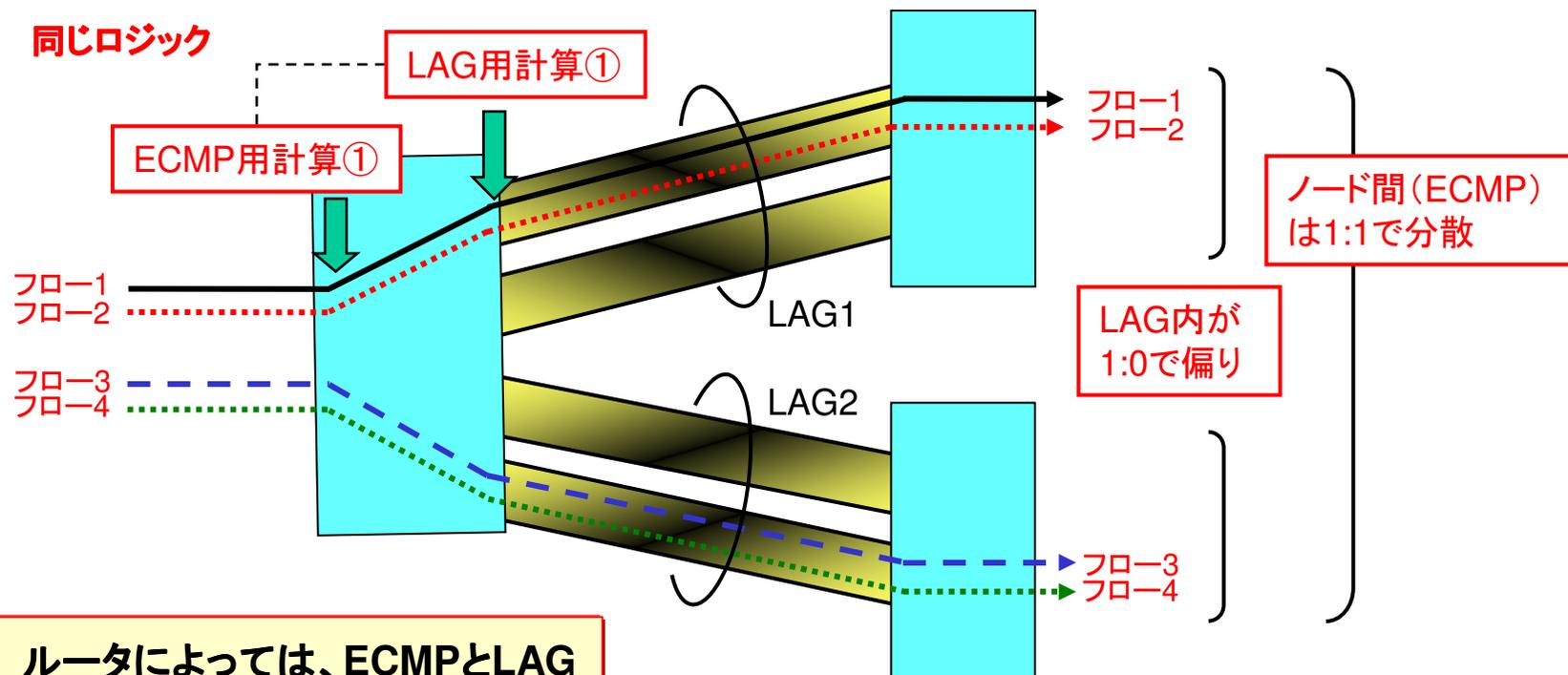
例2： hash値が32個の場合のLAG内トラフィック分散

5本LAG	4本LAG	3本LAG
IF#1 H1, H6, ...H26, H31	IF#1 H1, H5, ...H29	IF#1 H1, H4, ...H28, H31
IF#2 H2, H7, ...H27, H32	IF#2 H2, H6, ...H30	IF#2 H2, H5, ...H29, H32
IF#3 H3, H8, ...H28	IF#3 H3, H7, ...H31	IF#3 H3, H6, ...H30
IF#4 H4, H9, ...H29	IF#4 H4, H8, ...H32	
IF#5 H5, H10, ...H30		
7:7:6:6:6 10+10+10*6/7+10*6/7+ 10*6/7= 45.7	8:8:8:8 10+10+10+10= 40	11:11:10 10+10+10*10/11= 29.1

←分散比率
←LAGの実効帯域

課題3: ECMPバランスとLAG内バランス Case1

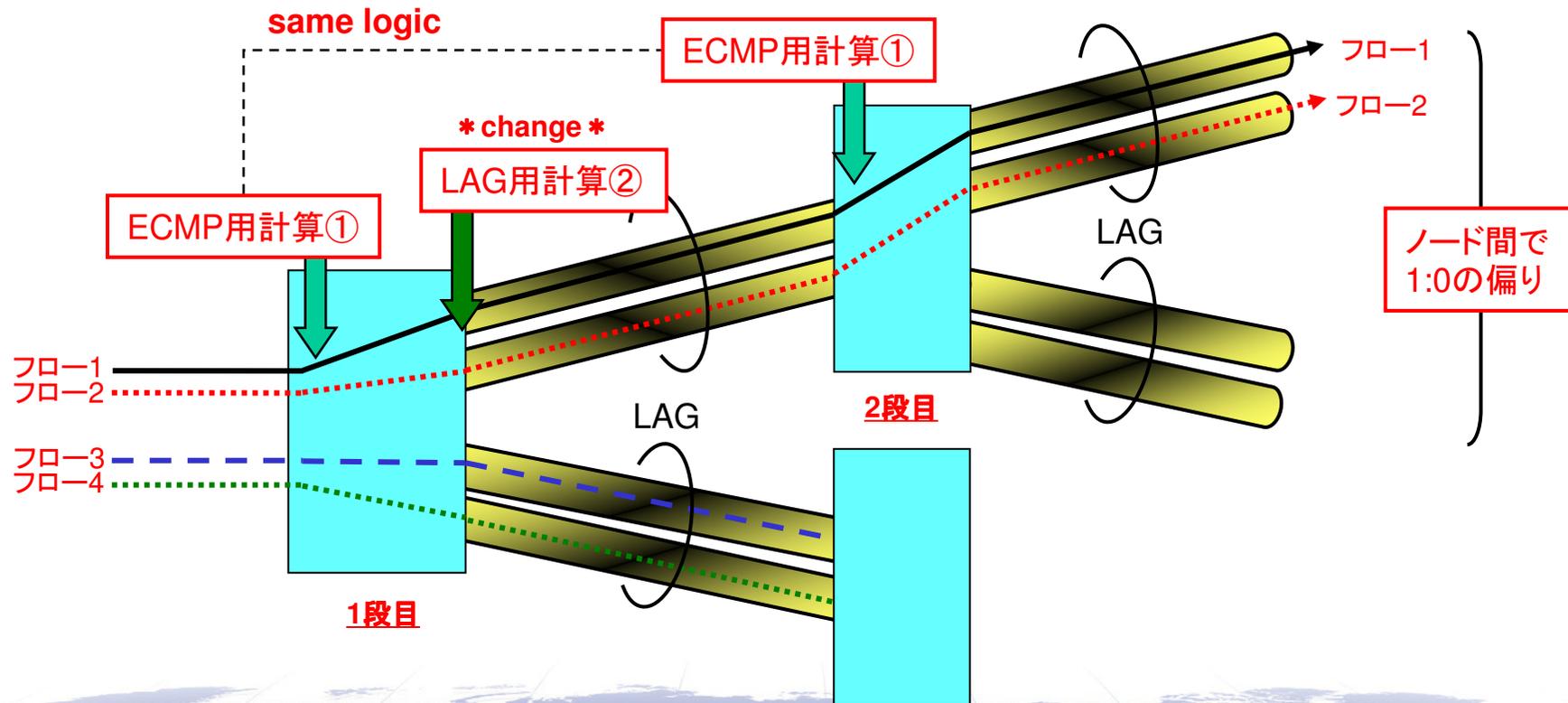
トラフィックの分散ロジックの関係で、ECMPバランスの後にLAG内のバランスを行うとLAG内の物理回線で偏りが生じる場合がある



ルータによっては、ECMPとLAG内のバランス計算がデフォルトで同じ場合がある

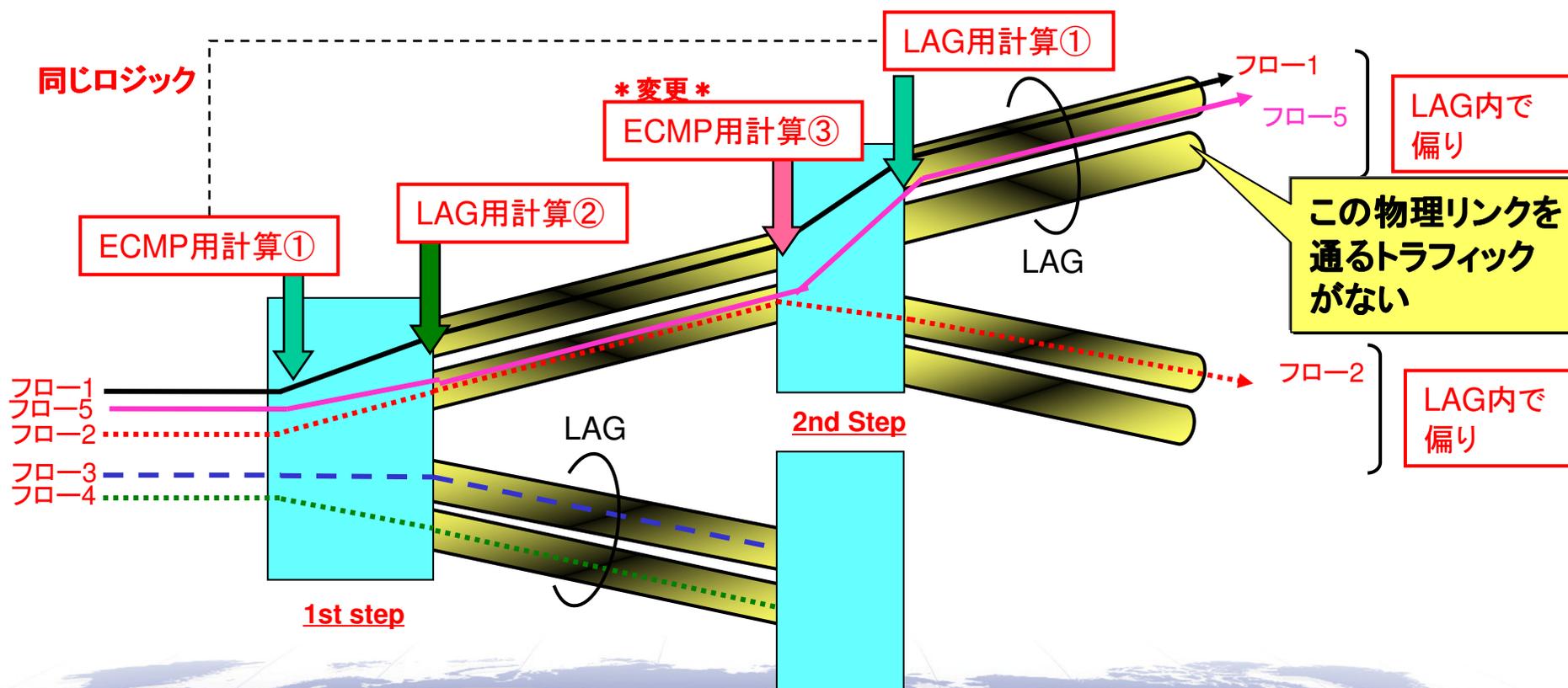
課題3: ECMPバランスとLAG内バランス Case2

同一機種種のルータで構成するNWにおいては、ECMPバランスにおいて同じ計算ロジックを使わないように注意する必要がある



課題3: ECMPバランスとLAG内バランス Case3

Case2の対処としてECMPバランスのロジックを変えた場合偏りは改善するが、IF故障等によってトラフィックが寄る場合、2段階ルータのLAG内で偏りが発生
 ※最近ではCase2,3を避けるためにrouter-IDを含むことができるものもある



Case 1からCase3を通して、計算ロジックの重なりや接続構成を踏まえてトラフィックバランスを考慮した設計・運用が必要

LAGの運用(1)

回線故障時のトラヒックあふれ

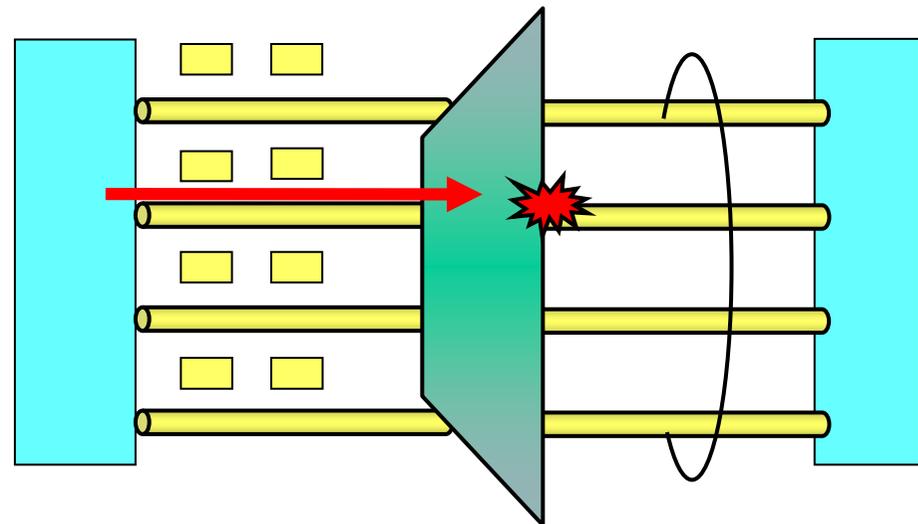
中継SW、伝送路等においてIF断とならない故障(サイレント故障)が発生した際に、該当物理回線を流れるトラヒックはロスとなる



回避策:

LACP (Link Aggregation Control Protocol)

- ・ 物理回線間で制御フレームをやり取りする
- ・ ただし、機種によって実装が違う点もあるため、相互接続による運用は注意



伝送装置

BFD Per Member Link

LAGの運用(3)

LAG回線の新規開通、工事時の確認、故障切り分け

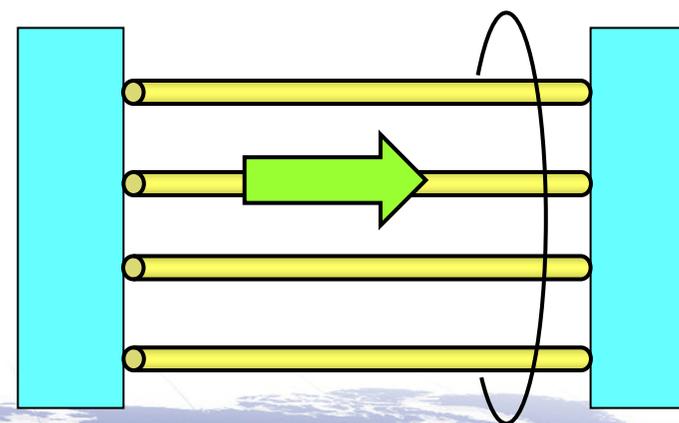
確認用ping:

hashに基づきLAGのうちどこか1ポートを通るため、他のIFをpingで狙い撃ちできない

- LAGの物理回線試験を行う場合には、生存IFを1本ずつにして、各々のping確認する必要がある
- minimum-linkを設定している場合には、回線試験時/戻し時に設定変更が必要

→ 今後、Ethernet OAM等に期待

- ITU-T Y.1731 / IEEE 802.1ag
LAGへのOAMは論理アドレス
- IEEE 802.3ah
LAGの物理単位にOAM送出可



その他

物理配線の問題

ルータ、SWの大容量化が進むにつれ、
物理回線数が増える

- ケーブル配線・交換等の作業が煩雑に
- 設定等大変

異速度LAG、異メディアLAG

LAG構築時の考慮

物理回線をラインカード(slot)にどう割り当てるか？

それぞれのMTBF

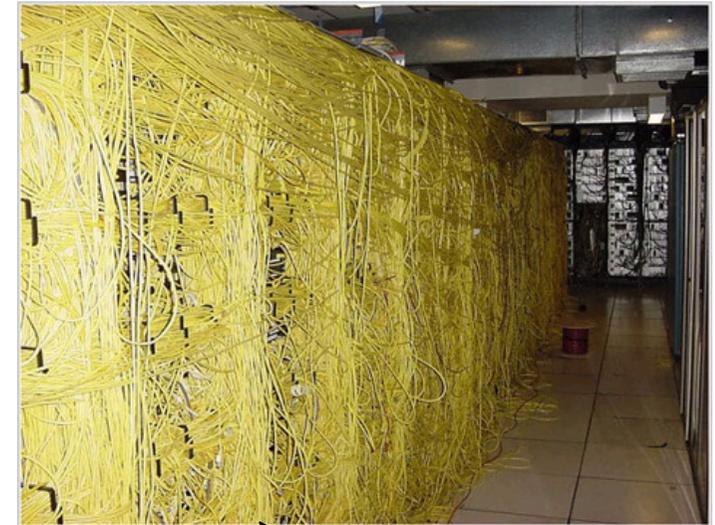
コスト

例1:出来るだけLAG回線を維持するポリシー

ひとつずつの物理リンクをそれぞれラインカードに割り当て、minimum-link = 1

例2:LAGはとっととダウンさせ、他へトラヒックを切り替えるポリシー

全ての物理リンクをひとつのラインカードに割り当て、minimum-link = 物理回線数



参考資料なので、
コム(OCN)設備では
ありません

**多くの回線を束ねることはいろいろ大変
100GEに期待**

1. 日本のインターネットトラフィックの現状
2. OCNの変遷(サマリ)
3. 過去の設計
4. 現在の設計
- 5. 未来の設計、構想**
6. まとめ

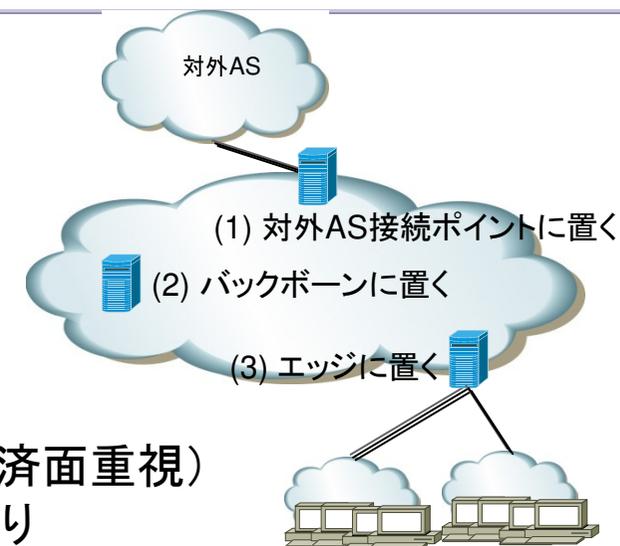


<p>(1)NW側の構成変更</p>	<ul style="list-style-type: none"> • ルータ、インタフェースの広帯域化（100GE化等） • 新装置導入、L2SW導入等
<p>(2) 流れるトラフィックの効率化</p>	<ul style="list-style-type: none"> • キャッシュの導入 • CDN

- トラフィック増加にどうせ対応するなら
 - 今よりさらによくしたい(今の課題のカイゼン)
 - トラフィック増加が収入増につながれば

- ぜひほしい
 - 1Tbpを超える帯域
 - 10GE、LAG、多数回線の運用限界
- 要望
 - もっと低価格に
 - CFP(光トランシーバモジュール)も高い
 - LR4、SR10だけでなくER4も
 - LR10とかあるみたいだけど
 - ポート密度を高めてほしい
 - 10Gを100Gに変えると、筐体当たりの帯域が減ったりして欲しくない
 - 異速度LAG: 100Gと10G
 - 相互接続性、運用性、Ether OAM、100G LAG
 - LAG問題は続く
 - さらなる先へ: 400G、1T Ether

- 2010年1月に法律改正
 - 日本でも設置可能となった
- 必要に応じて動画等のコンテンツをキャッシュのためこんでおく
 - これまでは、Peer/Transit経由で運んでいた
 - 遠くても安いネットワークで運びがち(速さよりも経済面重視)
 - 回線帯域、Transit費用、遅延、、、いろいろ課題あり
 - これからは、ISP内にキャッシュサーバを置いてさくっと運ぶ
 - 帯域節約、Transit費用節約、遅延解消、、、いろいろいいことありそう
- 実際の設置にあたっては課題もあり



(1) 装置課題	キャッシュヒット率、キャッシュの保持時間(古いキャッシュはいつ捨てる?) 装置の帯域不足
(2) 設置箇所	どこに設置?
(3) 故障時の対応	バックアップ回線を用意?

1. 日本のインターネットトラフィックの現状
2. OCNの変遷(サマリ)
3. 過去の設計
4. 現在の設計
5. 未来の設計、構想
6. まとめ



- トラフィックは今後も伸び続ける
- 過去様々な設計を行ってきた
 - トラフィック対応
 - メディア更改、ルータ更改、トポロジ見直し、回線増強
 - フォワーディングスケーラビリティ対応
 - etc...
- 我々のミッションはトラフィックを安定して運ぶこと
 - Hyper Giantsの時代
 - トラフィックが増加したって、技術を駆使して前向きに設計！
- 未来の設計は？



会場の皆様へ質問

- トラフィック増加にあたって何か苦勞や課題はありますか？
- トラフィックを安定して運ぶために、過去、どのようなネットワーク設計上の工夫をしてきましたか？
 - ルータ、I/F大容量化
 - トポロジの見直し
 - 帯域制御
 - etc
- 今後も、トラフィックは増えていくと思いますか？
- その場合、トラフィックを安定して運ぶために、どのような工夫が考えられると思いますか？
 - ルータ、I/F大容量化(100GE導入)
 - コンテンツキャッシュの導入
 - QoS、圧縮技術
- ISPだけではなく、様々なお立場の方からご意見をお伺いしたい。

Thank you!

